

【 玖 珠 町 】

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：国語）

1 調査結果の分析

小学校：国語A

- 正答数の分布を見ると、12設問中10問（正答率83%）以上の高位層の割合が47.8%で、全国・県平均より5ポイント程度上回っている。
- 設問別では、12問中7問が全国・県平均を上回っている。中でも、「書く能力」「読む能力」に関する正答率が全国・県平均を6～8%上回っている。
- 正答数5問以下（50%未満）の割合が、9.1%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の児童の割合を10%未満にする」を達成できた。
- 「文の中で漢字を使う」設問では、無回答率が全国・県平均が6%前後に対して、本町では1.8%と低くなっている。
- 「文章の書き直し」「適切な敬語を使う」の正答率が全国・県平均と比べて5%前後低い。

小学校：国語B

- 設問別では、8問中6問で正答率が全国・県平均を上回っている。
- 正答数の分布を見ると、8設問中0問から3問（正答率37.5%以下）の層が全国・県平均より下回っていて、低位層の割合が全国・県より低くなっている。
- 設問「話すこと・聞く能力」では3問とも全国・県平均を上回っている。
- 「目的や意図に応じて、文章全体の構成の効果を考える」「目的に応じて複数の本や文章などを選んで読む」は全国・県平均より低くなっている。

2 具体的な改善方策

小学校：国語A

1 更なる基礎力の定着・向上のために

- ① 町で独自に作成した「学習語彙集」及び、「掲示用学習語彙カード」を有効に活用し、学習語彙の定着を図る。
- ② 読みの力を伸ばすため、目的に応じた読み方を身につけさせる授業づくりに取り組む。
- ③ 国語科の授業における系統的な指導を充実させる。
- ④ 国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
- ⑤ 各校に配置している新聞等を活用して、表現の違いによる読み手の受け取り方の違いを実感させる学習活動を仕組む。

小学校：国語B

1 「わかったことや疑問に思ったことを整理し、それらを関係づけながらまとめて書く力」を向上させるために

- ① 各教科において「わかったこと」「疑問に思ったこと」等を簡潔に書く習慣を身につけさせる学習活動を日常的に継続的に行う。
- ② 日常の授業の中で、前の人発言をとらえ、それに付け加えて自分の意見とその根拠を述べさせるなど事柄を関連づけて表現する機会を増やす。

2 無解答率の減少のために

- ① 学校挙げて、「書くこと」に慣れさせる活動（視写・メモ・短作文 等）の充実を図る。
- ② 各教科において、自分の考えを書く場を設定した授業づくりに取り組む。
- ③ ゆるやかな条件をつけて文章を書かせる経験を積み重ね、粘り強く継続させる。

3 更なる活用力の向上のために

- ① 図書館を活用した授業に更に積極的に取り組み、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。
- ② ペアやグループで読み取ったことや考えたことを自分の言葉で説明し合う場を設定し、自分の考えを再構成する経験を多く積ませる。

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：算数）

1 調査結果の分析

小学校：算数A

- 正答数分布グラフより、14問中11問（正答率78.5%）以上を見ると、町45%、全国34.9%、県37.9%である。上位層では、全国・県を10%以上上回っている。
- 設問別では、14設問中9問の正答率が全国・県平均を上回っており、特に「数と計算」「数量・図形の知識・理解」「数量・図形の技能」に関する正答率が高くなっている。
- 「除法で表すことができる2つの数量の関係」「十進位取り記数法で表された数の大小」を見る問いの正答率については、全国・県平均いずれも6ポイント以上下回っている。
- 正答数6問以下（50%未満）の割合が、16.5%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の児童の割合を10%未満にする」を達成できなかった。

小学校：算数B

- 「敷き詰められた模様の中から、条件に合う図形の見だし」「集まった角の和が360度になっていることの説明」「示された考えを解釈し、条件を変更して分配の法則へ」の設問では、全国・県平均を上回っている。
- 設問別にみると、10の設問中、正答率が全国・県平均を上回っているのは3問である。また、10問中5問ある記述式の問題において、全国・県平均を上回ったのは、1問だけであった。
- 日常の学習の中で、単に答えを要求するのではなく、理由やその式の過程を自分の言葉を使ったり、書き込んだりする活動の場が必要である。

2 具体的な改善方策

小学校：算数A

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 指導事項を明確にした授業の更なる充実を図る。
 - ② 町独自で実施している算数確認テスト（年4回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 町で作成した「学習語彙集」及び、「掲示用学習語彙カード」を有効に活用し、算数科の学習語彙の定着を図る。
 - ④ 児童の思考過程が見えることを重視したノートづくりを進める。
 - ⑤ 問題データベースをあらゆる場面で活用する。

小学校：算数B

- 1 無解答率の減少のために
 - ① 学校挙げて、「書くこと」に慣れさせる活動の充実を図る。
 - ② 各教科において、自分の考えを書く場を設定した授業づくりに取り組む。
 - ③ 児童のノートを計画的に点検し、表現力を把握するとともに、個に応じた適切なアドバイスを
する。
- 2 更なる活用力の向上の（二極化を防ぐ）ために
 - ① 言葉（特に習得した学習語彙）、数、式、図、表などを用いたりして、自分の考えを書いたり、説明したりする活動を重視した授業づくりをする。
 - ② 児童から引き出した数学的な見方・考え方を共有したり、吟味したりする場を意図的・計画的に設定する。
 - ③ 授業の中で、日常生活での経験や興味・関心と関連付けながら、判断の根拠を過不足なく説明することの大切さについて、児童が実感をもって理解できる授業づくりをする。
 - ④ 数値や文章を入れかえた多様な練習問題を繰り返し解かせる。

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（小学校：理科）

1 調査結果の分析

小学校：理科

- 正答数分布グラフより、16問中13問（正答率81.2%）以上を見ると、町25.7%、全国21.1%、県24.8%である。上位層では、全国・県を上回っている。
- 正答数16問中7問以下（正答率50%未満）の割合が14.7%である。全国32.1%、県20.9%であり、低位層は全国・県と比べて少なくなっている。
- 「科学的な言葉や概念の理解」「結果を見通しての実験の構想」「ろ過の適切な操作方法の理解」については、全国・県の正答率を大きく上回っている。

2 具体的な改善方策

小学校：理科

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 理科においては、領域によって定着度の差が大きい。定着できていない単元や内容を明確にし、それを補っていく取り組みをすることで、指導事項を明確にした授業の更なる充実を図る。
 - ② 自然の事物・現象の観察などを通して、「何のために、何をするのか」という目的意識を常に持たせた授業づくりに取り組む。
- 2 無解答率の減少のために
 - ① 実験事実や観察結果、図や表から読み取ったことを言語化して、考察、説明する学習指導の充実を行う。
- 3 更なる活用力の向上のために
 - ① 学習を通して獲得した知識と日常生活に見られる事物・現象とを関連付けて捉えられるようにする授業の工夫も求められる。

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：国語）

1 調査結果の分析

中学校：国語A

- 正答数15問以下（正答率50%未満）の割合が、6.9%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の児童の割合を10%未満にする」を達成することができている。
- 「文章の展開に即して除法を整理し、内容を捉える」「話し合いの話題や方向を捉える」の2問は全国・県平均を上回っている。
- 文脈に即して漢字を正しく読む・書く問題は、6問中3問が全国・県平均を下回っている。日常的・継続的な指導が求められる。
- 正答数分布グラフより、正答数23問～28問の人数が少なく、中位の層の底上げが求められる。

中学校：国語B

- 正答数の分布を見ると、9設問中6問以上（正答率66.6%）の割合が、全国・県平均を上回っており、活用力についても少しずつ改善の兆しが見られる。
- 設問別では、9設問中6問が全国・県平均を下回っている。また、記述式の問題については、3問中2問において無回答率が全国・県平均を上回っている。
- 話すこと・聞くことに関する問いの正答率がやや低い。

2 具体的な改善方策

中学校：国語A

1 更なる基礎力の定着・向上のために

- ① 指導事項を明確にした授業の充実を図る。
- ② 学校挙げて「読む・書く」基礎技能（正確に読む・速く正確に書く等）の習熟を図る取組を継続する。
- ③ 読みの力を更に伸ばすため、目的に応じた読み方を身につけさせる授業づくりに取り組む。
- ④ 問題データベースをあらゆる場面で活用する。
- ⑤ 基礎的事項の定着を図る家庭学習の課題を計画的に与え、習熟を図る。

2 漢字や語句の定着のために

- ① 国語科の授業における系統的な指導を充実させる。
- ② 国語科の授業だけでなく、学校挙げて組織的に取り組む体制をつくり、継続的に取り組む。
- ③ 漢字・語句に対する興味・関心を引き出し、伸ばす言語環境づくりに力を注ぐ。

中学校：国語B

1 表現技法に関する力を高めるために

- ① 文学的文章の単元や取り立て指導等で表現技法の種類や効果について丁寧に指導する。
- ② 学んだ表現技法を使って話したり、書いたりする学習活動を仕組む。

2 更なる活用力の向上のために

- ① 図書館を活用した授業に更に積極的に取り組み、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。
- ② 説明する場を意図的に盛り込んだ授業づくりを推進する。
- ③ 全ての教科において、多様な考えを引き出す学習課題を設定し、生徒個々に自分の考えをもたせる経験を多く積ませる。
- ④ ペアやグループで読み取ったことや考えたことを自分の言葉で説明し合う場を設定し、自分の考えを再構成する経験を多く積ませる。

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：数学）

1 調査結果の分析

中学校：数学A

- 正答数の分布を見ると、36設問中29問（正答率80.5%）以上では、町が37.6%、全国が35.2%、県が34.3%であり、上位層では、全国・県を上回っている。
- 設問別では、36設問中21問が全国・県平均を上回っている。特に「絶対値の意味」「数量の大小関係を不等式で表す」「連立二元一次方程式をつくる」「図形の証明」等の設問の正答率が高い。
- 正答数17問以下（50%未満）の割合が、17.8%であり、本町の学力向上に係る数値目標の一つである「全国調査A問題において50%未満の生徒の割合を10%未満にする」を達成できなかった。
- 「折り目の線の作図と角の二等分線の関係を理解」「合同であるために必要な辺や角の相当関係の理解」「与えられた資料から中央値を求める」の問題は全国・県の正答率と比較して6～10%ほど下回っている。

中学校：数学B

- 設問別では、14設問中3問で全国・県平均を上回っている。また、記述式の問題については、無回答率が全国・県平均をほとんど下回っている。
- 正答数の分布から見ると、14問中9問（正答率64.2%）以上は、町が28.7%、全国が32.6%、県が29.1%であり、全国・県平均を下回っている。
- 「放送計画で、1日目がA、2日目がBになる確率を求める」「全校よりも1年生の回答用紙によるくじ引きの方が曲Fが選ばれやすいことの原因を確率を用いて説明する」の確率の問題では、全国・県と10%ほどの差がある。

2 具体的な改善方策

中学校：数学A

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 指導事項を明確にした授業づくりを徹底する。
 - ② 町独自で実施している数学確認テスト（年4回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 問題データベースを活用する。
 - ④ 基礎的事項の定着を図る家庭学習の課題を計画的に与え、習熟を図る。
- 2 正答率50%未満の層を減らすために
 - ① 授業形態の工夫やドリルタイム等を通して、個別指導の充実を図る。
 - ② 町独自で実施している数学確認テスト（年4回）に向けた取組及びその結果を生かした補充学習の充実を図る。
 - ③ 教科部会を開催し、評価問題の作成や指導方法の交流を実施する。

中学校：数学B

- 1 更なる活用力の向上のために
 - ① 生徒の実態や教材の系統性をもとに、各学年の単元における身につけさせたい活用力を明確にして授業を構想する。
 - ② 言葉、数、式、図、表などを用いたりして、自分の考えを書いたり、説明したりする活動を重視した授業づくりを推進する。
 - ③ 生徒から引き出した数学的な見方・考え方を共有したり、吟味したりする場を意図的・計画的に設定する。
 - ④ 数値や文章を入れかえた多様な練習問題を繰り返し解かせる。
 - ⑤ 活用力の向上を意図した家庭学習の課題を計画的に与え、生徒の思考の傾向や表現力の実態を把握し、授業づくりに生かす。

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（中学校：理科）

1 調査結果の分析

中学校：理科

- 正答数分布グラフより、27問中22問（正答率81.4%）以上の割合は、町は34.7%で、全国（32.6%）・県（29.1%）であり、上位層では、全国・県を上回っている。
- 記述式の設問については、6問中4問で全国・県平均を上回った。
- 主として「知識」に関する問題では、11問中5問で全国・県平均を上回った。また、主として「活用」に関する問題では、16問中9問で全国・県平均を上回った。

2 具体的な改善方策

中学校：理科

- 1 更なる基礎力の定着・向上のために
 - ① 理科においては、領域によって定着度の差が大きい。定着できていない単元や内容を明確にし、それを補っていく取り組みをすることで、指導事項を明確にした授業の更なる充実を図る。
 - ② 自然の事物・現象の観察などを通して、「何のために、何を求めて」観察・実験を行うのかという目的意識を常に持たせた授業づくりに取り組む。
- 2 無解答率の減少のために
 - ① 協働的な学習（少人数による観察実験や教え合い、意見交換など）を充実させ、実験事実や観察結果、図や表から読み取ったことを言語化して、考察、説明する学習指導の充実を行う。
- 3 更なる活用力の向上のために
 - ① 学習を通して獲得した知識と日常生活に見られる事物・現象とを関連付けて捉えられるようにする授業の工夫に取り組む。
 - ② 学校図書館を活用した授業を取り入れ、複数の資料を読み比べたり、必要な情報を読み取り、自分の表現に生かしたりする活動の充実を図る。

【 玖 珠 町 】

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（児童・生徒質問紙）

1 調査結果の概要

児童質問紙

- 「理科で観察や実験を行うことが好き」をはじめ、理科に関する回答で肯定的な回答をした児童が、全国・県平均を上回っているものが多い。
- 「自分には、よいところがあると思う」「将来の夢や目標を持っている」を肯定的に回答した児童は、全国・県平均を上回っている。
- 生活習慣に関わる「朝食を毎日食べていますか」「毎日、同じくらいの時刻に寝ていますか」「毎日、同じくらいの時刻に起きていますか」を肯定的に回答した児童は、全国・県を上回っている。
- 「学校の決まりを守っている」「いじめはどんな理由があってもいけないと思う」で肯定的な回答をした児童が全国・県平均を上回っている。
- 「地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか」に肯定的な回答をした児童は、県・全国平均を下回っている。

生徒質問紙

- 「理科の勉強は好きですか」をはじめ、理科に関する回答で肯定的な回答をした生徒が、全国・県平均を上回っているものが多い。
- 「数学の勉強は好きですか」をはじめ、数学に関する回答で公的的な回答をした生徒が、全国・県平均を上回っている。
- 「生徒の間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができますか」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を6ポイント以上上回っている。
- 「家で、学校の宿題をしているか」「家で、学校の授業の予習・復習をしているか」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を上回っているが、「家での予習・復習において、教科書を使いながら学習しているか」に肯定的な回答をした生徒は、全国・県平均を下回っている。
- 「地域社会などでボランティア活動に参加したことがありますか」に肯定的な回答をした児童は、県・全国平均を下回っている。

2 玖珠町の児童・生徒質問紙の調査結果をふまえて

- 児童・生徒のほとんどが、基本的な生活習慣を身につけ、落ち着いた雰囲気の中で学校生活を送っていることが見てとれる。
- 小・中学校において、授業に対して前向きに取り組もうとする姿勢の回答が多く、先生方の「新大分スタンダード」を中心にした授業改善の取組が児童・生徒に実感として伝わっている。
- 自己肯定感（自己存在感）を持たせるために、授業や特別活動をはじめとして、学校の教育活動全体の中で、生徒指導の3機能を生かした取り組みの充実が必要である。また、家庭や地域との連携の充実を図ることによって、児童生徒の自己肯定感を高めていく必要がある。
- 家庭での時間の使い方について、児童生徒個々の実態を丁寧に把握し、家庭と連携しながら個別に指導することと併せて、学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。
- 学校における教育活動全体を通して、児童生徒個々の表現力を向上させる取組（例：表現する中身をもたせ、説明する場を設定した授業改善、行事等における表現の場の設定と丁寧な事前・事後指導等）を充実させること、また、互いの考えを聴き合い、認め合う学校・学級の風土を創り上げていくことによって、表現力の更なる向上を目指す必要がある。

【 玖 珠 町 】

平成30年度 全国学力・学習状況調査結果（学校質問紙）

1 調査結果の概要

小学校：学校質問紙

本町においては、調査対象学校数が7校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

- 全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。また、44項目で全校が肯定的な回答をしている。
- 全学校が、学校全体の言語活動の実施状況や課題について、全教職員の間で話し合ったり検討を行っている。また、学校運営の状況や課題についても、全教職員間で共通理解をし、組織的な取組ができています。
- 全学校が、全国学力学習状況調査の分析結果を学校全体で教育活動を改善するために活用している。また、近隣の中学校と成果や課題を共有している。
- 近隣中学校と授業研究等の合同研修はできているが、教科の教育課程の接続や教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組が実施できている学校が半数である。

中学校：学校質問紙

本町においては、調査対象学校数が6校と少ないため、単純に全国平均・県平均の割合と比較して特徴を述べることは難しい面があるが、主なものとして以下の点があげられる。

- 全体的に見ると、肯定的な回答をした学校の割合が県・全国を上回っている項目が多い。また、34項目で全校が肯定的な回答をしている。
- 全学校が、全国学力学習状況調査の分析結果を学校全体で教育活動を改善するために活用している。また、近隣の小学校と成果や課題を共有している。
- 全学校で「学習規律の維持」に対する徹底を行い、生徒たちは授業中の私語が少なく、落ち着いていると回答している。
- 近隣小学校と授業研究等の合同研修はできているが、教科の教育課程の接続や教科に関する共通の目標設定など、教育課程に関する共通の取組が実施できている学校が半数程度である。

2 玖珠町の学校質問紙調査の結果をふまえて

ほとんどの町内小・中学校全校が各質問に対して肯定的な回答をしていること等から、各学校で知・徳・体バランスのとれた児童生徒の育成に向けて、組織的に取り組んでいることが見て取れる。

「理科の指導」に対する取組については、町内小・中学校全校で積極的に取り組んでいることが、調査結果からはっきりとうかがえる。

今後の主な課題は、次の3点である。

1 思考力・表現力の向上を目指した更なる授業改善

「新大分スタンダード」に基づく組織的な授業改善による授業の質の向上を目指し、児童・生徒自らが調べ、整理し、発表・交流する問題解決的な展開の授業を積極的に行う必要がある。その際、特に、児童・生徒個々の多様な考えを引き出す学習課題の設定とそれぞれの考えを比較・吟味する話し合い活動の質の向上に留意しなければならない。

併せて、場面に応じたICTの効果的な活用も心がけておきたい。

2 家庭学習の充実に向けた学校挙げての取組の強化

学校挙げて家庭学習の習慣化や充実を図る取組（例：家庭学習の方法の指導、家庭学習の記録やチェックの工夫、計画的・意図的な家庭学習用の課題の提示、家庭学習強化週間の設定等）を行うことによって、家庭学習の質・量ともに向上させる必要がある。特に、中学校においては、教科間の連携を確実に行之、全教職員が家庭学習の課題のあり方についての共通認識をもって提示するよう配慮することが必要である。

3 学校間の連携の強化

小中連携、また、同校種間の連携を深め、9年間を通して共通して指導する内容の焦点化や有効な指導方法の共有等を行うことによって、教職員の更なる指導力の向上を図りたい。